

指導資料



鹿児島県総合教育センター

国語 第116号

— 小, 中, 特別支援学校対象 —

平成 22 年 4 月発行

言語活動の充実を図る国語科指導の在り方 — 新学習指導要領を踏まえて —

新学習指導要領では、思考力・判断力・表現力等の育成を図るために、各教科等において言語活動を充実することが求められている。

これは、「知識・技能を習得するの、これらを活用し課題を解決するために思考し、判断し、表現するの、すべて言語によって行われるものであり、これらの学習活動の基盤となるのは、言語に関する能力である*」からである。

言語の教育である国語科は、各教科等における言語活動の基盤となるため、その果たす役割は大きい。そこで、本稿では、国語科における言語活動の充実を図る指導の在り方について述べる。

1 国語科における言語活動の充実

小中学校の新学習指導要領解説国語編の国語科の改訂の要点に、「言語活動の充実」として、『話すこと・聞くこと』、『書くこと』及び『読むこと』の各領域においては、基礎的・基本的な知識・技能を活用して課題を探究することのできる国語の能力を身に付けることができるよう、日常生活に必

要とされる記録、説明、報告、紹介、感想、討論などの言語活動を具体的に例示したことが挙げられている。

また、言語活動例がこれまでの「3 内容の取扱い」から「2 内容(2)」に移行され、また、内容はより具体的な表現となり、例示数も表 1 のように大幅に増えた。

表 1 言語活動例の例示数

	話すこと 聞くこと	書くこと	読むこと	合計 (現行)
小学校	10	12	14	36 (27)
中学校	6	8	9	23 (7)

これらのことから、示された言語活動例を基に、学校や児童・生徒の実態に応じて、様々な言語活動を工夫し、授業を構想していくことが、国語科における言語活動の充実につながるといえる。

2 言語活動例の意義

言語活動例の意義は、二つの側面から考えられる。

一つは、国語科の指導内容を言語活動を通して身に付けさせるという手だてとしての側面をもつ(図 1)。

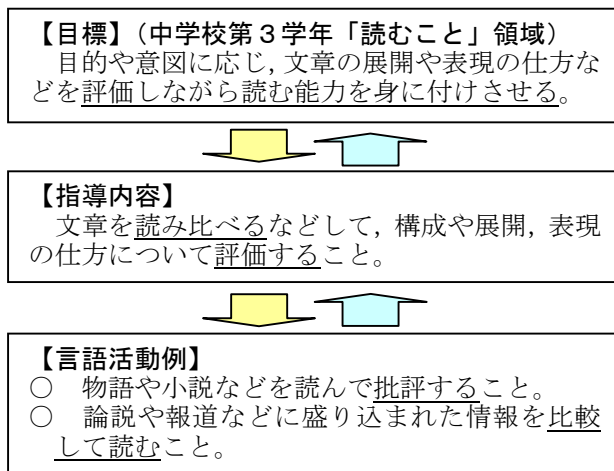


図1 目標・指導内容・言語活動例の関係

もう一つは、「基礎的・基本的な知識・技能を活用して課題を探究していく国語の能力を身に付ける」ということから、活動自体が能力であるという側面をもつ。

例えば、図2のように、習得したことを活用して、推薦文を書く能力を身に付けることによって、図書委員会の活動、他教科等の学習に生かすことができる。

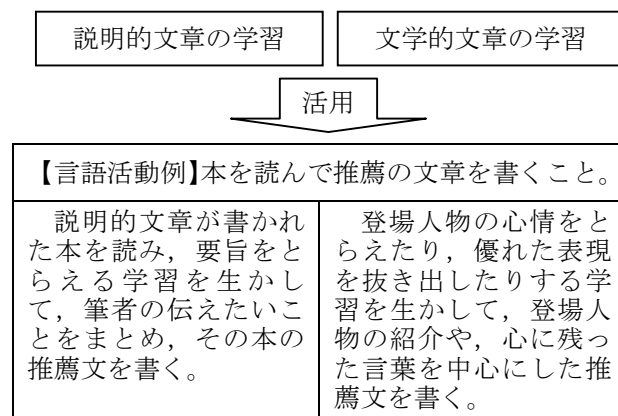


図2 知識・技能の活用と言語活動例の関係

3 言語活動の充実を図る国語科指導の視点

現行学習指導要領で初めて言語活動例が示され、その具体化が図られてきた。一方で、学習のねらいが明確でなく、「活動あって学びなし」の学習活動が見られたり、言語活動が発展学習だと誤解されたりするな

どの課題も指摘されてきた。

これらの課題を踏まえ、言語活動例の具体化を図り、言語活動の充実を図るための視点を以下に述べる。

- (1) 学習のねらいと言語活動の意義を踏まえた効果的な言語活動の工夫

言語活動は、どんな力を身に付けさせたいのか、どんな力を活用させたいのか、これからの学習にどうつなげたいのかなど、国語科の目標を達成するために行われるものである。そのことを明確にして、単元の指導計画を立てたり、授業の構成を考えたりすることが大切である。

小学校第4学年の詩の教材「春のうた」（草野心平）を基に、教材の特色と学習のねらいを踏まえ、効果的な言語活動を取り入れた単元構成について述べる。

【教材の特色】

春を迎えて喜ぶ「かえる」の様子を擬声語、繰り返し、体言止めなどの詩の表現技法を巧みに使って表現した楽しく明るい詩である。

【学習のねらい】（指導内容）

- 内容の中心や場面の様子がよく分かるように音読すること。（Cア）
- 場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて、叙述を基に想像して読むこと。（Cエ）

【単元の構成】

（A案）

- ①単元名 群読で詩を楽しもう
- ②言語活動

春を迎えて喜ぶかえるの様子などを叙述に基づいて想像し、擬声語や繰り返しのリズムを楽しみながら群読をする。

(B案)

①単元名 自分の「春のうた」を作ろう

②言語活動

「春のうた」をモデルに、春を迎えて喜ぶ他の動物の様子を想像し、自分だけの「春のうた」を作成する。

このように、同じ教材でも、学習のねらいと教材の特色などを踏まえ、様々な言語活動が工夫できる。児童・生徒の実態等を踏まえ、より効果的な活動を構想していくことが必要である。

(2) 各領域の関連を図った言語活動の工夫

国語科の学習活動は3領域すべての要素を含んでおり、新学習指導要領でも「相互に密接に関連付けて指導する」ことが求められている。

また、言語活動例も関連の深い活動が、例えば次のように例示されている。

【小学校第1・2学年】

ア 想像したことなどを文章に書くこと。
(「書くこと」)

ア 本や文章を楽しんだり、想像を広げたりしながら読むこと。(「読むこと」)

4 ページの実践例のように指導内容に応じて各領域の関連を図った言語活動の工夫が効果的である。

(3) 基礎的・基本的な知識・技能と言語活動とをつなぐ工夫

習得した基礎的・基本的な知識・技能を活用して言語活動に取り組む際、教材文で学習し習得した知識・技能を整理し、どのように活用して言語活動に生かせばよいのかを再確認して、言語活動につなげていく学習場面を工夫することが必要である。

(4) 年間指導計画への位置付け

言語活動を意図的・計画的に取り入れて学習効果を高めるためには、1年間の学習内容やねらいを明確にし、指導内容の重点化を図るとともに、どのような言語活動が効果的であるかを考え、年間指導計画に位置付けていくことが大切である(表2)。

なお、言語活動の充実を図るためには、言語環境の整備も重要である。各学校で、日常会話や掲示物等における言語の適正な使用、発表話型の工夫、学校図書館や辞書の積極的な活用、読書指導の充実を図ることなどが求められる。

＊ 『小(中)学校学習指導要領解説 総則編』
文部科学省 H 20 年 8 月

【参考文献】

『小(中)学校学習指導要領解説 国語編』
文部科学省 H 20 年 8 月

(教科教育研修課)

表2 言語活動を位置付けた年間指導計画例(中学校第1学年)

月	教材名	(1)重点とする指導事項					(2)言語活動例				時数	○付き数字:主な学習活動 ●:指導のねらい
		ア	イ	ウ	エ	オ	カ	ア	イ	ウ	他	
4	朝のリレー	○				○	○				○	2
5	竜			○		○	○				○	6
6	クジラの飲み水		○		○					○		4

【各領域の関連を図った実践例】日置市立飯牟礼小学校 松本浩輔教諭の実践から

- 1 単元名 人物の考え方や生き方をとらえよう「わらぐつの中の神様」
- 2 指導内容と言語活動例の関連
 - ・ 登場人物の相互関係や心情、場面についての描写をとらえ、優れた叙述について自分の考えをまとめること。(C読むこと 指導内容エ)
 - ・ 経験したこと、想像したことなどを基に、詩や短歌、俳句をつくったり、物語や随筆などを書いたりすること。(B書くこと 言語活動例ア)

過程	主な学習活動	
つかむ	1 「人物の生き方や考え方をとらえよう」という単元であることを知り、単元の見通しをもつ。 (1) 全文を読み、心に残ったことや疑問に思ったことを書く。 (2) 初発の感想を交流し、読みのテーマを作る。	作者の他の作品を並行読書させ、作者の思いをより身近に感じさせる工夫をしている。
見通す	2 場面ごとに感想を整理して、学習課題作りをして、学習計画を立てる。 (1) 場面分けをして、登場人物を確認しあらすじをつかむ。 (2) 学習計画を立てる。	初発の感想を基に学習課題を設定し、学習計画を立てることで、児童の学習意欲を高める工夫をしている。
調べる	3 学習計画に沿って、「わらぐつの中の神様」を読み取る。 (1) マサエとおばあちゃんのわらぐつに対する見方の違いを考える。 (2) おみつさんの人柄と雪げたが欲しいという思いを読み取る。 (3) おみつさんのわらぐつに込めた思いを読み取る。 (4) なぜ、大工さんは、おみつさんの作ったわらぐつを買ったのか考え、わらぐつを通したおみつさんと大工さんの心の通い合いを読み取る。	学習活動3(1)では、わらぐつに対する考えをマサエになりきって3行日記に書かせ、(2)では、おみつさんが欲しいと思う雪げたについて挿絵を基に説明させ、(3)では、思いのわかるところにサイドラインを引かせたり、その理由を書き込ませたりするなど、学習過程に応じて言語活動を計画的・意図的に取り入れている。
深める	(5) おばあちゃんの話聞いたマサエの心の動きを考えることで、登場人物の心の通い合いを読み取る。	
まとめる	4 心を込めて取り組むことは、互いの心を通わせることにつながるということを基に、「わらぐつの中の神様」の続き話を書く。 (1) おじいちゃんとマサエの会話を中心に話の続きを書く。 (2) 続き話をグループで交流し、自分の話と友達の話と比較して、自分の考えをまとめる。	

- ・ 本教材での「登場人物の相互関係や心情、場面についての描写をとらえ、優れた叙述について自分の考えをまとめる」学習をしたことを生かして、「想像したことなどを基に、物語を書く」という言語活動を取り入れている。そのことにより、作品の内容の理解を深めたり、自分の考えをまとめたりすることにつながる。
- ・ 図3の続き話は、四つの場面を設定し、マサエ→おじいちゃん→おじいちゃん→マサエの順の会話文形式でまとめさせている。続き話を文章として書かせることも考えられるが、書き慣れない児童にとっては、このような4コマ話のような形から入ることも有効である。



図3 続き話の作品例